

ビオトープの花

タガラシとケキツネノボタン

春のビオトープを飾る花の代表格の一つが、タガラシとケキツネノボタンです。この二つと一緒に取り上げたのは、二つがよく似ているからです。いずれも水田の中や畦に咲く黄色の花で、花も見間違ふほどに似ています。それもそのはず、両者はキンポウゲ科の花だからです。二つの見分け方は、花が径8ミリと小さいものがタガラシ、花が径1.2センチのものがケキツネノボタンです。

タガラシは噛むと辛いので「田辛し」と言われているようですが、多少とも有毒ですので口にしないでください。ケキツネノボタンの名の由来は、葉が牡丹に似ているためだそうです。

田植えの前の田んぼを美しく飾ってくれるこれらの花を是非ご覧ください。



タガラシ



ケキツネノボタン

(佐々木光正)

合同作業日誌から ‘09. 12. 19 & ‘10. 2. 20

‘09. 12. 19 年末最後の合同作業・ビオトープの清掃、枯れたヨシ類刈り取り



‘10. 2. 20 ホタル水路の掘削・田んぼに侵入したクレソン除去

名戸ヶ谷ビオトープだより

第41号

2010年春号

<http://nadowaya-biotope.org/index.html>

名戸ヶ谷ビオトープを育てる会発行

発行責任者： 篠崎 将 Tel/Fax: 04-7173-6353

今年 は 生物多様性年

十月に名古屋で生物多様性条約締約国会議

(COP10) 開催 (五面に関連記事)

「名戸ヶ谷ビオトープを育てる会」 第8回総会無事に終了

第8回総会は2010年1月23日の10時～11時、柏市南部クリーンセンターホールで開かれた。挨拶の中で篠崎会長はビオトープで観察される50種の湿地性植物と100種をこえる生きものについて触れながら「育てる会」会員相互による日頃の協力の成果と活動の着実な広がりに対して謝意を表明した。また、来賓挨拶の中では柏市環境保全課主幹の高橋裕之氏も宅地開発に伴って湧水や水量減が目立つ昨今の市内の自然環境の中で名戸ヶ谷ビオトープが果たしている貴重な役割について触れた。多様な生物の生息場所としてのみならず田植え・稲刈り・生きものの観察会を通して名戸ヶ谷小学校にとって貴重な体験の場所を提供しているビオトープは保全すべき自然を物語る貴重な存在である。柏市の自然環境保護に対する市民へのPR活動の一環として昨年6月に一週間に亘って柏そごうに於いて環境保全課が名戸ヶ谷ビオトープを育てる会と共催した「名戸ヶ谷ビオトープ展」が果たした役割も大きい。



高橋氏はまた、今年の10月に名古屋市を会場に開かれるCOP10(生物多様性条約第10回締約国会議)と第3次生物多様性国家戦略(第1部、第2部)の概略を紹介しながら、柏市としても来年に向けた生物多様性プランを策定する予定である、と述べた。高橋氏が副主幹の海老原修氏とプロジェクターを用いながら「柏市の自然保護活動」と題して行った講演の概要については「講演の概略」を参照されたい。

小笠原議長のもとで行われた総会では、出席者数の確認に続いて「2009年度活動実績」と「2010年活動計画」についての説明が配布資料に基づいて各担当幹事によって行われたあと、2009年度決算に続いて2010年予算案が全員の拍手で承認された。2010年度活動・計画画面での大きな変更点としては「名戸ヶ谷ビオトープだより」(広報誌)の季刊化(年4回)があげられる。総会終了後11:00—12:00に亘って環境保全課の高橋主幹、海老原副主幹によって「柏市における自然保護活動」の題目で講演会が行われた。

「講演の概略」 柏市における自然保護活動 (項目のみを列举)

1.気候、2.水系、3.土地利用、4.水辺の環境、5.樹林地の環境、6.生態系、7.自然環境調査、8.公園整備、9.自然景観、10.景観計画、11.柏市環境基本計画、12.自然環境、13.施策の展開(1)～(3)。テーマ毎の各項目に添えられている地図、図表、写真、グラフは省略します。
*第3次生物多様性国家戦略(配布された資料)については省略します。

(春山秀雄)

名戸ヶ谷ビオトープに 春のいぶき

春のいぶきーそれは水音です。

台地の縁から出る湧き水の音です

早春の湧き水は可愛い声で歌います。永いあいだ台地に閉じ籠っていた水が、春の予感に胸をときめかせて湧き出るので。まだ寒さが残る日々ですが、陽射しを背に受けてキラキラと輝いて流れます。春の気配を感じた湧き水は、陽気になって、思わず口ずさみます。ランラン、チョロチョロ。湧き水が春を喜ぶ歌、それが水音です。

ビオトープの始まりは台地からの湧き水です。だから、春のいぶきは、その水音、ランラン、チョロチョロから始まります。

春のいぶきーそれは樹々の芽吹きです

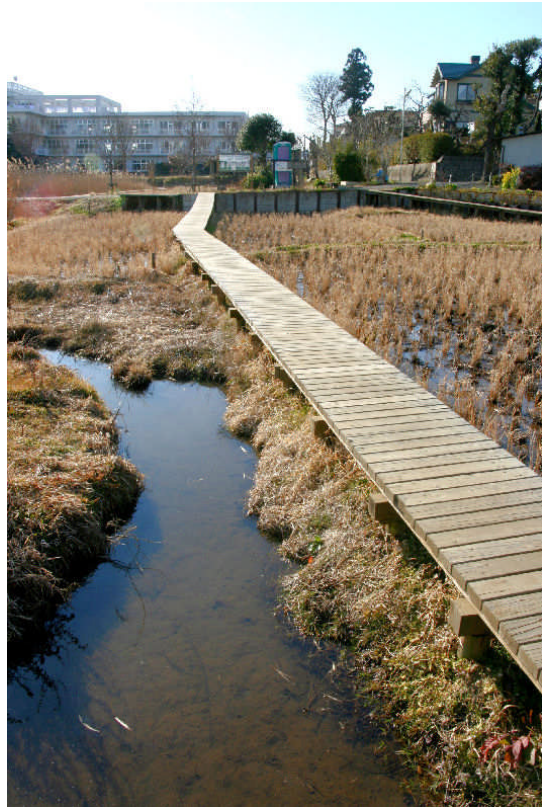


湿地は枯れ草で覆われたままだというのに、気の早い樹々が春を急ごうとしています。ハンノキ、ネコヤナギ、カワヤナギがいち早く枝先に蕾をつけています。「この寒風の中、どうしてそんなに急ぐの？」と尋ねると、樹々たちは「春の水音が聞こえるからだよ」と言います。これらの樹々はいずれも湿地に住む樹です。だから、足元を流れる湧き水の水音が聞こえるのです。とは言っても、まだ寒々とした季節です。だから、ヤナギ類は厚い綿毛の帽子をかぶっています。

春のいぶきーそれはカエルの卵です

いつの間にやら、ビオトープのあちこちにニホンアカ

ガエルの卵が見られるようになりました。一体いつ卵を産んだのか、さっぱり分かりません。でも毎年確実に2月になると沢山の卵が現われます。眠っていたカエルはどうしてこの時期に目覚めるのか。お分かりですね。そうです、これも水音なのです。春の水音が優しくカエルの眠りを解いてくれたのです。一仕事を終えたカエルは再び眠りにつくそうです。次に目覚めるのは初夏の香りを運ぶ水音です。



ビオトープとわたし

橋本保明



はじめまして・・・

今年度より家族会員にて入会させていただきました橋本です。当初はビオトープの意味も理解しておらず、米作りを体験してみたいという動機でした。でも、実際に体験してみると米作りも大変ですが、ビオトープの方も奥が深いですね。

「原稿を」ということなので、この1年間で感じたことを脈絡なく書かさせていただきます。

まず驚いたことは、ビオトープの水田がとても深かったということです。水面から見ている分には大したことはないのかなあと思っておりましたが、一歩足を踏み入れると自分の体が沈んでいき、「もう、この場所から動きたくない」的な感覚に陥ります。

幸いにも、まだ、転んではおりませんが、転ぶのは時間の問題かなあとも思っています。

作業は月に2～3時間程度でしたが、中腰の作業には慣れていないのできついものがありました。でも、下準備をされている方はもっと大変なんでしょうね。手配をしていただいた方、お疲れ様でした。有難う御座います。

「ビオトープ」についてですが、「その地域の本来の動植物を維持する」という基本的な考え方はわかりました。

でも、実際には個人的には難しいですね。なぜなら、私は北海道の出身で子供の頃に見てきた周りの動植物と、ここに本来あった動植物とがあまりに違いすぎており、外来種との区別がつかないからです。

田舎では、日本ザリガニ・水カマキリ・デンドロビウムみたいなタニシや先の尖った巻貝・小さな2枚貝・ドンピン（太いドジョウ）・エゾサンショウウオ等がおりました。

この地域の植生についてのベースがないため、皆さんに教えていただきながら今後も作業を続けていきたいと思っています。よろしくお願いします。

最後に昨年、収穫した「お米の行方？」ですが、当然、自宅でもおいしく食べましたが、中原小おやじの会企画の工作イベントに4キロ程を提供いたしました。

「竹でお米を炊く」という企画でしたが（時間がかかりすぎて1部しか製作できず、最後は炊飯器で炊きましたが）、子供達の食欲が旺盛でおかわり続出。

満員御礼となりました。子供たちはとても喜んでおりました。

また、中原小では本年3月に校内に「ビオトープ」の下地が完成します。

篠原会長には当初から参加いただき、他の小学校にはないいい「ビオトープ」ができそうです。ありがとうございました。

2～3年後、安定した時にどんな「ビオトープ」になっているのが楽しみです。子供たちの思いのこもった立派な看板もありますので、是非、見に来てください。

編集後記

年4回化の第2号で8ページを継続するかどうか戸惑いがありました。というのも自然を相手のビオトープは冬の寒い時期は動きが少ないからです。田んぼに氷が張るような寒い時期には、人間だって何もやる気になりません。

しかし、それなりに大型の原稿が着々と集まり、やはり8ページへのチャレンジを続けることにしました。しかし、若干の穴があって、そこは自分で埋める羽目になりました。その成果は皆さんの評価を待つほかありません。

最後に原稿が揃ったのは印刷予定の日でした。そのために、かなり大きなレイアウト変更が必要になりましたが、そこは編集に使っているパブリッシャーの威力でなんとかまとまったかなというところでは。

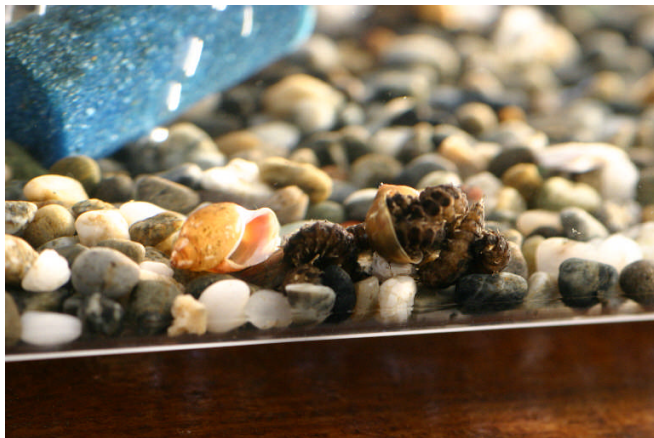
(高田)

ホタル幼虫飼育体験記

藤平三郎

昨年(2022)の12月13日に松清さんからヘイケボタル幼虫と水槽一式を頂き、幹事の篠崎さん、村川さん、そして小生とでの飼育が始まりました。2ヶ月ちょっと経過しましたがその体験を記します。貰い受けた幼虫は今現在、健在です。

全くの素人で、松清さんからの飼育方法のレジメとガイドブックを借りて、各自30匹ずつ分けて貰いました。まずは日常管理で餌やりは一週間に1回サカマキガイを10匹程度与えています。巻貝はビオトープの田んぼからまとめて取ってきて、それは別の容器で飼育しています。巻き貝の餌は、落ち葉や金魚用の餌を与えこれまた元気です。従って、ホタル幼虫とサカマキガイの両面飼育となったわけで、日毎に愛着が湧いてきています。水槽の水替えはそれぞれやはり週に1回行ない、小さな糞が相当溜まっていて又食べ終えた貝のカラを捨てています。



写真上および下 水槽の中でサカマキガイにむらがっているホタル幼虫



2階の寒い部屋に置いてあるので活動は不活発で20℃位が適温の様です。夜になると幼虫がかたまって体をねじまげて貝を食べています。日中は、敷き詰めた小砂利の下に潜っている事が多くどうも夜行性の様です。又、水槽のガラス面に寒天状のブロックがいくつか張り付き始め、その中に小さな粒々がびっしりでこれはサカマキガイの卵とのこと。

ここで孵化まではいきませんが、あの田んぼでは凄い数の世代交代が行われ繁殖しています。三家族の幼虫は、水温、水質共に良で、そして天敵の心配もなく快適な毎日を過ごしているものと思われます？ 暖かくなり4月に松清さんの分と合わせて計200匹を、ホタルゾーンへ放流予定です。来年には更に幼虫飼育者の倍増を期待しつつ、今年こそはと、ホタル飛翔を夢見て一心不乱で育てている毎日です。

リアカーが使えるようになりませんでした

ほとんどフレームだけの中古リアカーが寄贈されました。これに箱をつけて塗装しなおし、見違えるようになりました。今まで名戸ヶ谷小学校から借りて使っていましたが、これで時前のができました。小笠原さんに感謝です。



リニューアル



春のいぶきーそれは田んぼの花々です

水音を真っ先に感じる花はタネツケバナです。3月になると小さな白い花が水田にたくさん見られます。この頃の水音は少し賑やかになりトントン、サラサラと聞こえます。水田の泥の中に眠っていたタガラシやケキツネノボタンも、水音がトントン、サラサラに変わると永い眠りから目覚めます。いよいよ本格的な春が始まります。

春のいぶきーそれは子供達の歓声です

水音に誘われて子供達がやってきました。生きものを見つけるたびに子供達の歓声が上がります。子供達の歓声が上がると水音は聞こえなくなります。春のいぶきを演じた水音の役目はこの頃に終わり、子供達の歓声がこれに代わります。

本文・写真は佐々木光正氏



ビオトープと写真とカメラ

篠崎 将

ビオトープに携わるようになってから、記録として写真を撮ることが多くなった。春夏秋冬、植物、動物を撮り続けている。名戸ヶ谷ビオトープの発足した2003年ごろからデジタルカメラが普及しはじめ、私もフィルムカメラからデジタルカメラに代えた。デジタルカメラは使い慣れると、これほど便利なものはない。誰が撮ってもきれいな写真が撮れる。名戸ヶ谷小のネイチャークラブの観察会でも、児童が学校の備品であるデジカメを持ってくるが、被写体に向けてシャッターボタンを押すだけである。これで驚くほどきれいな写真が撮れている。オートフォーカス、手振れ補正など最近の進歩には驚かされる。

私は小学生の頃から写真が好きで、カメラを持っていたが、当時はピント合わせも目測で、シャッタースピードも絞りも考えて、カメラにセットしなければならなかった。従ってきれいな写真が撮れたときの喜びはひとしおであった。

ビオトープでは年間100種以上の生きものを観察することが出来る。生きものは、出来るだけ自然の状態で撮るよう心がけているが、難しいのは水中の生きものと鳥である。水中の生きものは、自然の状態では記録として残せるような鮮明な写真を撮ることは困難なので、5面透明なアクリル製の撮影用水槽に入れて撮ることが多い。水槽は自分で使いやすいよう自家製で中で生きものが動きまわれないよう、被写体に合わせ大、中、小が必要である。



魚やエビは横の姿が美しいのでこの姿を、また小さいものは実物より拡大することで、その美しい姿を見ていただきたいと心がけている。

生きものの中でも、鳥は人が近づくと飛び立つので、なるべく離れたところから撮ることになる。このため焦点距離の長いレンズ（500mm以上）が必要になるが、最近手振れ防止が付

いているので、三脚なしで撮影出来るようになった。技術進歩の恩恵である。撮影で最も難しいのは、動いている生きものである。その中でも最も難しいのは、飛んでいる鳥である。最近の一眼デジカメでは殆どのカメラに動体撮影用のモードが備わっている。シャッターチャンス逃さないため、一度シャッターボタンを押すだけで、1秒間に5枚以上の写真を撮ってくれる。フィルムカメラではフィルムの長さに限りがあり、考えられなかった機能である。これでシャッターチャンスは得られるが、もうひとつの問題はピント合わせである。これは被写体が不規則な動きをする場合や、刻々と撮影距離が変る場合に適用する撮影モードを適用するが、ピントの合った写真が、100枚中に数枚あれば良いほうである。鳥を撮っている仲間と情報交換をしているが、100枚撮っても満足するのは1枚もないことがあるという。私も同じである。飛んでいる鳥の鮮明な写真が容易に撮れるカメラの出現を期待している。

2009年版のビオトープ写真集の表紙には「ノシメトンボを食べるカマキリ」を記載し、クモの欄では、「コバネイナゴを捕らえたナガコガネグモ」と「アオバハゴロモを捕らえたジョロウグモ」を記載したが、今後はこのような食物連鎖の記録も増やして生きたいと考えている。

2009年には削除したものを除き、約3000枚の写真を撮った。ビオトープの写真集を作成するに当たり撮影した写真を見ると、自分で満足できる写真はほんの僅かである。不満足な写真の中から選び出すのに苦労する。現在のところ満足のいく写真を撮るには、撮影枚数を増やすこと以外ないと考えている。今年もビオトープに通う日が多くなりそうだ。

ニホンアカガエルの産卵

2月10日、今年初めてニホンアカガエルの産卵が確認された。昨年は2月2日だったので1週間ほど遅い。産卵に適した気象条件は、一般に気温の高い雨の降る夜間といわれているので、今年はこの時期に気温の低い日が続いたため、遅れたのだろうか。ニホンアカガエルの卵塊には、約1500個の卵が入っているといわれている。産卵は年1回で、産卵可能なメスが、1匹あたり1個の卵塊を産卵するので、卵塊を数えることでその地域のニホンアカガエル数を知ることが出来るといわれている。



ます。昨年ビオトープでは55個の卵塊が確認されました。今年は昨年以上になることを期待しています。

また、ニホンアカガエルは千葉県のレッドリストで、最重要保護生物（カテゴリーA）に指定されていますので、大切に保護したいものです。（篠崎）

追記 2月20日の合同作業日に数えたところ63個の卵塊がありました。その後、3月1日に数えたところ、すでにオタマジャクシに孵化した卵塊もあるという情報もあり、卵塊の数は50個でした。（高田）

随想めいた解説

生物多様性年について思う

今までの支配的な考え方は、人間にとって都合がいい動植物を残し、あるいは一方的に採取し、都合の悪いものは、害虫、雑草、などと決めつけて駆除の対象とするというものでした。

例えば、コウノトリは美しい羽を取るために乱獲して絶滅に追い込みました。北米ではバッファローを取り尽くしてしまいました。また、水田、畑では農薬を散布して、たしかに「害虫」「雑草」は減ったかもしれないけれど、メダカも昆虫も生きられないようにしてしまいました。

これは、結局、回り回って人間も住みにくい、健康被害もでてくるという、レイチェル・カーソン言うところの「沈黙の春」の世界を産み出してきたのです。

この反省が、生物多様性とか、種の保存とか、絶滅危惧種を救えということになってきた訳ですが、現実には自然破壊はとどまるところがなく、例えば柏周辺でもオオタカはどこに残っているのか？という状況になってきました。

生物の多様性が人類の生存を支えるという考え方から、世界全体で取り組むということで、国連では1992年に生物多様性条約が作られ、2008年現在では日本を含む190カ国とE Uがこの条約を締結しています。（アメリカは未締結）

この条約のポイントは、資金、技術などの問題で取り組みが十分でない途上国を、先進国が資金、技術を援助するという事にあります。1994年に第1回締約国会議がバハマで開催されて以来、さまざまな課題で国際会議が重ねられ、今年は第10回の締約国会議（C O P 1 0）が名古屋市で開催されることになっています。

日本はこの条約の発効以来、最大の抛出国で全体の22%を抛出しているとのことです（といっても3.3億円程度）。また、条約を推し進めるための特別な立法は必要ないとしています。かけ声はしても実効的な措置は遅れているのが実態ではないでしょうか。

生物多様性をはかるモノサシも問題です。いくつかの生きもの、例えばコゲラ、シジュウカラ、チョウ類のサトキマダラヒカゲなどを指標としたり、あるいはクマタカやツキノワグマといった行動範囲の広い生きものを判定役にしたりして評価するという手法があるようです。（高田）